



～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

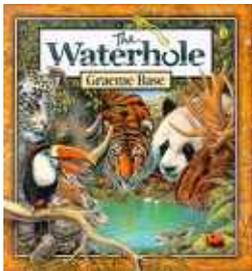
Vol.27 2012年3月号

- 子どもたちに読み聞かせしている絵本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・エイドリアン・リース
- 待つということ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 飴を舐めると...・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・柴生 彰
- 誰かを愛しつづけることの大切さを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・三寄 翔子
- 新刊紹介・・藤田 博

子どもたちに読み聞かせしている絵本

エイドリアン・リース

子どものとき、寝る前に絵本を読んでもらったのを覚えています。好きな作家があり、好きな絵本がありました。とりわけ好きだったのが、ロジャー・ハグリーブスの「Mr. Men シリーズ」で、シリーズ中の人物すべてを空で言うことができるほどでした。いま、三人の子の父として、できるだけたくさんの絵本を子どもたちに読んでやりたいと思っています。ここではお気に入りのものから三冊を紹介します。



最初に、オーストラリアの作家グレイアム・ベースによる *The Waterhole*、すばらしい絵のついたファンタスティックな絵本です。物語はシンプルな数え唄形式のもの、サイやオオハシ、カンガルーといった動物が出てきます。この本には、水を大事にすることや友情の大切さなど、深いメッセージが込められています。それぞれのページに隠された動物を探し出す楽しみも与えてくれます。Animalia や *The Eleventh Hour* など、ベースにはこの他にもお薦めの本がいくつもあります。

次に、ドクター・スースの *Hop on Pop* です。これはリズムカルな音が並んでいることで子どもたちが読みやすい、大変に有名な本です。ドクター・スースは数多くの本を描いています。いずれも豊かな想像力によって生み出された登場人物とリズムカルな音に溢れています。ドクター・スースの本の中で最も好きなのは、*Hop on Pop* です。単純さとユーモアがその理由です。私の子どももすぐに理解します。絵も大好きです。これはドクター・スースの他の多くの本と同様に、iPad 用の電子版もあります。対話可能なこれら電子版は、子どもの教育にとってより一層効果的です。

最後に、私の好きな日本の絵本をご一緒したいと思います。宮西達也の『きょうはなんてうんがいいんだらう』です。この物語に深いメッセージ性はありませんが、絵は大変にキュート、物語は愉快です。物語の多くの登場人物、その一匹一匹になり切って演じる機会を読者に与えてくれます。宮西達也はいくつもの本を描いています。その中では「ティラノサウルスシリーズ」にあるものが非常にすぐれています。



どの絵本を選んで読むにしても、聞いている人の楽しみを増すのは、どう読むかであり、読むことによって作り出される雰囲気です。読んでもらっている本に子どもたちが喜んで耳を傾ければ、一人で更に読みたいと思うに違いありません。そうしてページの中に見出した楽しみを次の世代へと伝えていくのです。(訳：藤田 博)

- 「The Waterhole」 / Graeme Base / Harry N. Abrams
- 「Hop on Pop」 / Dr. Seuss / Random House
- 「きょうはなんてうんがいいんだらう」 / 宮西達也 / 鈴木出版

(英語教育講座)

待つということ

藤田 博

片山玲子作・片山健絵『もりのてがみ』(福音館書店)は、「さむい さむい ふゆです。」に始まります。春の訪れを待つひろこが、りすに手紙を書きます。「もりに すみれが さいたら もみのきのしたで まっています。」とかげにも、ことりにも、うさぎにも書き、もみの木の枝に下げます。「ゆきが とけるころ、きゆうに あたたかい つよい かげが ふきました。」「すみれが さいたか もしれない」と思ったひろこが、もみの木のところに行ってみると手紙はすべてなくなっています。「とんとん」、玄関で小さな音がします。開けてみると、くるみと石とタンポポと木の実が、届けられたそれが、りす、とかげ、うさぎ、ことりからの返事の手紙なのです。



手紙を書き、返事が来るのを待つ、この間の時間をつなぎ、時間を運ぶのが郵便やです。ここに郵便やはいません。「もりの まんなかにある おおきな もみのき」がその役を果たしているのです。「こんどは とかげに てがみを かいたのよ。よんでくれるかしら」、ひろこがもみの木に言うのは、「かわらない みどり のえだを」付けたもみの木が郵便やだからなのです。もみの木は春の到来を待つクリスマスの木、その意味において果たしている役割は同じ。春が来るのを待つ、手紙が来るのを待つ、二つの「待つ」がもみの木でつながっているのです。



内田麟太郎文・味戸ケイコ絵『かあさんから 生まれたんだよ』(PHP研究所)の始まりは、水平線を見つめる「ぼく」。「まちつづけた。ずっと。水平線を みつづけながら。」待つのは「うみの母」です。「ゆうひが しずんでいく。それでも……。ぼくは まちつづけた。」待ちつづけてもの先にあるのがネガティブなのは見えています。それでも待ちつづけたのは、「海の母」と思ったから。「海の母」には、待ちつづけさせる何かがあったのです。「それから なん年してからだろう。ぼくは すこし じぶんを わらった。海の母じゃなくて、生みの母だったんだ。」時間が経ち、大人になることによってまちがいに気づく、正確には、まちがいがまちがいではなかったことに気づくのです。待ちつづけるマイナスと、思い違いのマイナス、二つのマイナスがポジティブなものに転じたのは、待っている「ぼく」の先にあったいまの「ぼく」が子どもころの「ぼく」を見ているから。何より「ぼくは ちちになっていた」からなのです。

みやざきひろかず作・絵『チョコレートを食べたさかな』(ブックローン出版)は、少年が「ちやいろの ちいさな カケラ」を落とすことに始まります。それを食べた魚は、「ひるもよるも……。どこにいても……。その あじが 忘れられな」くなり、魚でいることがつらくなってしまいます。「ながいながい あいだ まっては みたけれど もう いちど ちやいろの カケラを たべる チャンスは めぐって こなかった。」チョコレートの甘さによって、待つことのつらさ、苦さを知ってしまったのです。「5かい なつが すぎて 6かいめの ふゆが くるころ ぼくは しんだ。」待った6年が、円環を象徴する12の半分になっているのがわかります。円いアーチ形の橋の上に行く男の子、その下の川を泳ぐ魚、橋の半円と水面に映る半円が一つになって円ができていくこともわかります。「きがつくと ぼくは 少年だった チョコレートの すきな 少年だった。」魚から見たとき、少年から見たとき、両者に違いが見えるのは、回り始める起点のみ。少年が落としたチョコレートを食べた魚が少年に、その少年が落としたチョコレートを食べた魚が……。飲み込む、飲み込まれるが作り出すエンドレスの世界にあって、いずれが先かを決めることはできないからです。



ひろこは手紙の返事を待ち、「ぼく」は「海の母」を待ち、魚はチョコレートを待ちます。待つことは行動でありながら、行動の停止を意味します。じっとして動かずに待ちつづけるは、期待と不安の狭間に立つことを意味するのです。待つ期待が待つ不安を飲み込み、待つ不安が待つ期待を飲み込む、待つことが円環と結びつくのはそのためなのです。

「もりのてがみ」/片山玲子作・片山健絵/福音館書店

「かあさんから 生まれたんだよ」/内田麟太郎文・味戸ケイコ絵/PHP研究所

「チョコレートを食べたさかな」/みやざきひろかず作・絵/ブックローン出版

(英語教育講座)

飴との出会いを語る、それは幼小期へと戻ります。

私の記憶にある最初の出会いは、「サクマドロップス」です。食べたい味が出てきますようにと振ると、カラカラと音を立てます。その時の期待と興奮。そして手に取って、食べたかった味と同じだった時の感動。白色のハッカ味が出てきた時の無念さ。ハッカ味が苦手でしたので、戻して再挑戦しました。



次に記憶に残っているのが「どんぐりガム」。飴とガムがコラボレーションしています。途中からガムに変身するのです。最後まで噛まない、これが私の舐め方です。口の中で溶けて消えていくのを確認します。チョコレートも舐め続けることが多いのです。それが普通だと思っていましたが、「チョコは噛んで食べるからいいんだよ。舐め続ける人なんていないよ」と妻から言われた一言が衝撃的。「そうか・・・最後まで舐め続けるのは飴だけなんだ。」と実感。そういうわけで飴は最後まで舐め続けるのが私のポリシーですが、「どんぐりガム」だけは途中で噛んでしまいます。飴が溶け切れるのを待てないのです。自分に負けたと思いながら、最後は我慢し切れず・・・。

「シュワシュワ飴」は、ソーダ味やコーラ味のように、炭酸が入っているのではと思える飴です。昔から両親に、「子どもの頃はコーヒーと炭酸は飲んではいけない。骨が溶けてしまい、大きくなれないからだ」と言われ続けてきました。そうした中で、この「シュワシュワ飴」との出会いは最高でした。炭酸飲料が飲めなくても、ジュースと同じ味を飴で楽しむことができるわけですから。飴と言えばソーダ味かコーラ味、いつも決まっていたのです。その他に二つ一緒に食べると味が変わる飴、ひもを引っ張って大きな飴だと大当りでもう一個など、飴との思い出は語り尽くせません。

この『ふしぎなキャンディーやさん』では、子豚が狸のおじさんと出会い、飴をもらいます。最初にもらう飴は黄色。これを舐めると重たいものでも持ててしまうのです。次に緑色。これを舐めると自分自身が消え、透明になってしまいます。最後に赤色。これは狼に変身します。変身するこの飴の力を使って、子豚は他の動物にいたずらをするのですが、「だめだ、だめだ へたくそ！ あんなんじゃ ウサギ、いや ねずみだって つかまえないぜ！」と本物の狼から指導を受けることとなります。子豚は震えながら狼たちのいる場所へ。しかし、飴の力が消えてしまい、子豚に戻ったことを見破られてしまうのです。オオカミに食べられそうになった子豚は、緑色の飴を舐めて逃げようとします。しかし、匂いだけはごまかすことはできません。今度こそ捕まってしまうもうだめ・・・と思ったその時、「こまった ときに なめると ビックリする ことが おこるよ」と狸のおじさんからもらっていた白色の飴を舐めると、巨大豚に変身。狼はびっくりして逃げていったという話です。

この絵本を手にした時、すぐに惹かれてしまいました。家に持ち帰り、5歳の息子と3歳の娘に読んでやりました。すると息子は、「ぼくは、白色の大きくなるキャンディーがいい。はやくパパやママみたいに大人になりたいから。」娘は、「私は力もちになりたい」と言って掛け布団を持ち上げていました。公開研究会当日、担任をしている子どもたちに読んでやりました。読み終わった後、「どんな飴がほしい」と尋ねると、たくさんの方が、「空飛ぶ飴がほしい」との声だけが覚えています。

飴一つで幸せに。子どもたちは一粒の飴を舐めるだけで、幸せなひと時を感じるのかもしれませんが、そして、この本に出合った子どもたちは、「空を飛ぶ飴」のような飴を作ってくれるのかもしれませんが。

「ふしぎなキャンディーやさん」 / 宮西達也 / 金の星社

(附属幼稚園教諭)

誰かを愛しつづけることの大切さを教えてくれるこの一冊

佐野洋子作・絵『100万回生きたねこ』(講談社)

三寄 翔子

あるところに、立派なとらねこがいました。ねこは、100万回死に、100万回生きたのです。「あるとき、ねこは王さまのねこでした。」その後、船乗りの、サーカスの手品つかいの、どろぼうの、ひとりぼっちのおばあさんの、小さな女の子のねこになりました。その度に、ねこは死に、生き、100万回生きてきたのです。



「あるとき、ねこはだれのねこでもありませんでした。」立派なのらねことなったねこは、自分が大好きになったからです。ある時、ねこは、本物の愛を見つけました。素直な自分に気付いたのです。「白い うつくしいねこ」との出会いでした。「おれは100万回もしんだんだぜ！」自慢するねこに見向きもしない白いねこは、「そう。」と言うだけでした。「そばにいてもいいかい。」ねこは初めて自分以外の相手を好きになったのです。

「ねこは、白いねこのそばに、いつまでもいました。」ねこは、白いねことたくさん生まれた子ねこが自分以上に好きだったのです。ねこは、白いねこいつまでも一緒にいたいと思いました。しかし、別れの時が来ました。「夜になって、朝になって、また夜になって、朝になって、ねこは100万回もなきました。」100万回生きてきたなかで、初めて泣いたのです。「ねこは、白いねこのとなりで、しずかにうごかなくなりまして。」ねこが生き返ることは二度とありませんでした。

この本と初めて出会ったのは、幼稚園のときでした。そのときの感想は、いろいろな世界に行くことのできるねこをうらやましく思う程度でした。大学生になり、この本に再び巡り合い、100万回を生き、そして死んだねこの生の重さを考えさせられました。100万回を生き、真の愛を見つけるこの物語は、誰かを愛しつづけることの大切さを教えてくれるのです。

(英語コミュニケーションコース4年)

新刊紹介

ハナ・ドスコチロヴァー・作 / ズデネック・ミレル・絵 / 木村有子・訳
『もぐらくんとみどりのほし』(偕成社)

「つちのなかのいえは、あめがふったあのような、たいようがみずあびをしたような、においがします。」春がやってきたことをうれしく思う、土の中に暮らすもぐらほどにその思いが強いものはないのかもしれない。「もぐらくんが、いちばんわくわくするのは、つちのうえに かおをだすとき」(『もぐらくんとパラソル』) 春となればなおのことに違いはないのです。

うさぎを招待するため天井の穴を大きくしていたもぐらは、石が割れ、光るものが飛び出したことに気づきます。「みどりのいし」です。「みどりのいしがそらでかがやいたら、きっといちばんきれいなほしになるだろうなあ」、「そうすれば、・・・みんなが、ながめることができる」、もぐらはそう考えます。一つまた一つと石を積み、その上によじ登って空を目指すものの、到底届きません。うさぎの上に10匹のかえるが肩車をします。それでも届きません。3羽の小鳥が口にくわえて運ぶことに。ようやく舞い上がったその時、「もっともっと、はばたいて！さもないと、おちるわよ！」と「おしゃべりカササギ」がちょっかいを出します。小鳥にしゃべらせることで口を開かせ、「みどりのいし」を落としてしまおうとの魂胆です。小鳥が高く舞い上がる、上がってはカササギが口を出し、また落とすの繰り返しです。



「1000かぞえるあいだに、このいしは そらで、かがやきはじめるから、ずるをしないで、ちゃんとかぞえるのよ。」ずるをするのはカササギの方、5までしか数えることのできないもぐらが1から数え直すのを知っているのです。積み上げたものが元へと戻る、ここに見えているのも「落下」です。その間にカササギは「みどりのいし」を盗んでしまいます。「なみだが、みどりのいしにおちました。」その時、「みかづきが、もぐらくんのすぐちかくまで すうっとおりてきた」、「落ちてきた」ではなく「下りてきた」のです。三日月に乗ったもぐらは、「みどりのいし」を流れ星が去った穴に。「ほらね、あそこ、みんなが見上げるのは、地上に戻ったもぐらが指さす先に光る「みどりのいし」なのです。

「おしゃべりカササギ」、「泥棒カササギ」のために「落下」が繰り返されます。その度にもぐらの思いは高みへと登り、石は輝きを増していくのです。「みどりのほし」にこだわったのは、地中に棲むもぐらだからこそそのこと。「みどりのほし」は、地中で眠っている間にもぐらが夢見つけた空へのあこがれ、それが結晶化したものと言えるのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館